



第65号  
平成18年(2006)  
10月18日発行  
(年4回発行)

### 『連句入門』重版に思う

青木 秀樹

今年七月、東明雅先生の残された名著『連句入門』（中公新書）の九版が発売された。

初版の登場が昭和五十三年六月であったので、ずいぶん長い時間が経過しているが、内容が少しも古びていないことに驚く。本書は八版が出てから約十年、ほぼ絶版状態にあり、古書店にたまに出て高い値段がつくという状態にあった。猫養会の新しい会員や地方の連句愛好者などから、再販の予定はないのかとの問合せが何件もある状況で、本書は幻の名著になっていた。

このたび、その幻の名著『連句入門』の復活を実現したのは、中央公論新社に働きかけた生田目常義さんの情熱であり、先ず感謝の意を表したい。島村暁巳さんをチーフとするプロモートチームの努力により、八月末時点で猫養会が扱った販売部数は五〇〇部を超え、

猫養会の底力を示している。猫養会会員のみならず全国各地の連句グループ、連句愛好者からの注文が押し寄せた結果である。そのほか全国各地の書店への注文・取寄せもあり、次第に品薄になりつつあるのは喜ばしいことである。今回の発行部数は一千部と少ないものの、千人の新しい連句愛好者が『連句とはこういうものだ』という正しい知識を得られることになり、現代連句発展に大いに寄与することになると思われる。

全国に連句愛好者は一万人以上いると推定されるが、その多くの人は独学で、しかも少人数の「仲間連句」である。指導者不在、式目も知らず、それでも連句を楽しんでいる人々が多数いる。

『連句入門』のあとがきに明雅先生がお書きになった「俳諧（連句）の研究と実作とを続けてきて、いつも痛感していたことは、新しくこの道に入ろうとする人に対して、平易な入門書が極めて乏しいということであった。しかも、入門書の必要性は、最近ますます大になってきているように思う。それで、及ばずながら、自分で書いてみようと思ったのが、本書を作った動機である。」という状況は今日でも変わっていないことになる。

さて、私のことである。『連句入門』に接したのは連句を始めて間のないころ、昭和五十七年五月発売の再販本（四六〇円）、六十七年五月発売の五版（五四〇円）が今でも手

元にある。その間何冊も購入し、連句に関心を示す後輩に無理やり押し付けた覚えがある。正直に言つて、私の本書に接した最初の感想は「むずかしい」ということであった。古典や近世文芸にあまり縁がなく、短詩文芸に関する基本的知識もなかった私は、説明のために引用されている例句の意味がよくわからず、内容がすつきり頭に入らなかつたのである。囲碁や将棋の入門書はそれを覚えると強くなるという入門書である。連句に定石などなく、前句に応じて自由に発想するところに連句の面白さがあることさえよく知らない頃のことであった。少し連句実作の経験を積んでから読むと、『連句入門』の内容が少しずつ分かってくる。自分の連句習熟度を示すテスト用紙のようなものだと思った。

連句実作を熱心に五年も経験すると、連句がわかったような気がしてくる。付け転じの呼吸が分かってきて、捌きを習いはじめめる。このような時期が危ない。句数を競いたがる、式目を自己流に拡大解釈する、他者の句にケチをつける、二者衝撃の平句を作りたがる、などの症状が出たら、小天狗になっている証拠。成長が足踏みする兆しである。

猫養会会員には連句の正道をしつかりと学び、大成してほしい。あやしい症状がでたら、初心に戻るために何度でも『連句入門』を読み返してほしい。『連句入門』は必ずその答えを出してくれる筈である。

## 猫養会式目の整理

東 明雅

従来、猫養会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。それで、現在猫養会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

### 二 句数

- 1 句数は春秋三句より五句（普通三句）夏冬一句より三句（普通二句）とし、季戻りを嫌う。
- 2 恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

### 三 去嫌

- 1 同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。
- 2 同字・神祇・釈教・恋・無情・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りであるが、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。
- 3 人情自、人情他、人情自他半、人情無（場）の各打越および縮を嫌う。
- 4 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

### 四 一巻の構成

- 1 発句は当季とし、切字を入れる。
- 2 脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。
- 3 第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。
- 4 発句使用字（月、花を除く）、及び恋の字は一巻再出を嫌う。

- 5 発句以外に切字「や、かな」を嫌う。

- 6 表に懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。

但し発句はこの限りではない。

- 7 月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一

（二十韻ではウ一、ナオ五）とし、

場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

- 8 花の定座はウラ十一、ナウ五、（二十韻ではナウ三）とし、引き上げることはあってもこぼさない。

- 9 恋は一巻に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。二十韻ではどちらか一回でもよい。

- 10 かな止めまたは漢字止めの五連続を嫌う。

- 11 拳句は発句に返らぬよう特に注意する。

### 五 韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

### 六 仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

### 一 心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

ねこみの第二十一号

一九九五年十月号より転載

平成十八年六月十八日首尾  
於 新宿ワシントンホテル

歌仙擬「日本列島」(一花二月一星)

原田千町 捌

日本列島少し反り身に梅雨となる 千町

ビルの間の夏の燕 達子

習ひ初めノートパソコン立ちあげて 郁子

聞き覚えなきお茶の銘柄 了齋

天文台観測室の星の空 英子

「もみじ」の歌を合唱の子等 郁子

新任の村にもなじみ冬支度 了

若妻会から招待があり 達子

カサノバの血をたつぷりと継ぐらしき 英子

三角関係幼稚園にも 了

櫛比なす朱き鳥居を遠眺め 郁子

ずつしり重い冬至蒔蒔 了

又すこし伸びた氷柱を月透ける 達子

秘密結社は今も健在 了

目玉だけ出して被った白帽子 英子

山の駅舎に群るる人影 了

桃や咲く桃源郷か夢かとも 郁子

したたか酔へば亀の鳴く声 了

ナオ流鏑馬の射手は紅顔風光る 達子

友と楽しむ江ノ電の旅 郁子

エレベーターおっかなびつくりボタン押す 了

天国まではやはり階段 英子

西洋の幽霊足がちやんとあり 了

円朝聞きに浴衣着流し 英子

駆け落ちのひっそり暮す裏長屋

埋火掘って老いらくの恋

釈迦如来世俗の塵を薄く被て

足のグーチョキパーで壮健

月光の下にラリー車カーブ決め

鹿に注意の道路標識

ナウ土耳其産鱈子安く美味しくて

隣のピアノさらふソナチネ

父がまづ見る新聞の訃報欄

久に訪ひたる故里の川

ひらひらと仮名文字なりに花の散る

休まず回る風車発電

連衆 篠原達子 東 郁子 鈴木了齋

佐古英子

歌仙 「晴男」 橘 文字 捌

晴男なりし師のこと梅雨最中

十余の卓に置けるガーベラ

幼児の帽を斜めに駆け出して

動物園のおみやげは何

星空へ月は静かに昇りゆき

街の外れを抜ける爽籟

今年酒仕込む杜氏の力瘤

口下手なれど頼もしき彼

ばったりと昔の女とコーラスで

ダビンチコードモナリザの笑み

実験の解剖学者白衣脱ぎ

蹴球応援電子映像

伯耆富士神在祭の月まどか

田に点々と丹頂の赤

対向車なき二車線をぶっとぼす

早も真打寄席のトリ取る

盛りより艶の増しけり次の花

淡雪すでに消ゆる掌

ナオ虻蜂の得意顔なる温習会

脚へ煙草の船長の舵

お忍びの料亭談合嗅ぎつけた

食ふや食はずで造るテポドン

納戸より引つ張りだした扇風機

爺はしつかり竹夫人抱く

江南の紅楼通ひ結ぶ夢

寵愛競ふ生霊の怨

髪丸めすべて捨てたる尼御前

金庫に銭をたつぷりと貯め

月の下密かに掘りぬ乞食鶏\*

父に敵はぬべい独楽の技

ナウ徘徊を捜して廻るそぞろ寒

出自の村をひたすらに告げ

極小の島に主張す領土権

ツアー組むには足りぬ人数

惜し気無く散るひと本を我花と

蛙鳴き立て驚かす亀

\*乞食鶏・鶏一羽を丸ごと葉に包み、地中に埋め置いたものを掘り出し、蒸して食する。中国の地方料理

良

豊

啓

良

惠

啓

豊

良

啓

惠

良

啓

豊

同

惠

良

豊

良

啓

良

豊

啓

文

惠

連衆 小池啓子 本屋良子 高橋豊美

山寄一惠

歌仙 「ビル街を」 青木秀樹 捌

ビル街を低く飛びけり夏燕  
 バス待つ間のそぞる梅雨寒  
 すぐれものまた通販で取り寄せて  
 計画表をいつも直され  
 望の夜の湖の真中の島青く  
 とまどき揺れる風の芒野  
 じよんがらの三味線コンペ爽やかに  
 本山詣不在住職  
 ありがたや愛の啓示の降り来たり  
 金の斧より若い娘を  
 狼は羊の顔で言ひ寄つて  
 北越雪譜のままに月射す  
 囚はれて何を今更お勉強  
 鬢の向きが少しずれてる  
 満腹に玩具の銃をびたとつけ  
 ネットに入れて洗ふ靴下  
 花早き歳は景気の良くなる  
 蒟蒻植ゑる俄百姓  
 ナオ 豊大ばらもん風をやつとあげ  
 呑み打つやめて足りる年金  
 まつすぐで日当たりのよいお成道  
 なぜか水母が増え続けぬる  
 羅のドレスの好きな茶髪の娘  
 けもののが病みつきとなり  
 純情な山の男を振り回し  
 団塊世代迎ふ還暦

洋碧 洋麻 碧や 麻や 麻同 碧や 洋麻 碧樹 や 洋麻 碧や 麻子

老医師の付け句死体がまたも出る

DNAは争へぬもの  
 居酒屋に居続けて見る後の月  
 おけらの声に唱和する人  
 ナリ 赤い羽根形ばかりとなりゆきて  
 旅の枕に五拾セントを  
 煎餅とお茶で昭和を懐かしみ  
 親の大学行かぬ子供等  
 復帰する団十郎は花のもと  
 三和土に乾く春泥の跡  
 連衆 中林あや 大島洋子 松本 碧  
 内田麻子

歌仙 「縹めく」 鈴木千恵子 捌

青葉闇その奥底の縹めく  
 初蛸の声の遠近  
 古書店で百科事典を購ひて  
 スキップをして急ぐ踏切  
 詰将棋月の客より教へられ  
 箱いっぱい届くもろこし  
 地芝居のひよつとこ役を申し出て  
 傷んだ靴下捨ててすつきり  
 相伴の昨日にかはる今日の女  
 山手線でフルメイクする  
 かくれんぼ横丁といふ芸者路  
 貯めた虎の子すべて献上

洋麻 洋碧 碧や 麻同 碧や 洋麻 碧樹 や 洋麻 碧や 麻子

寒月に剥落の絵馬透かし見る

線言多き父の夜咄  
 ならず者宥めるかはた脅さうか  
 もやしばかりが目立つビビンバ  
 ホームラン打ちし補欠に花吹雪  
 心字の池に数珠子散らばる  
 ナオ 一つ聞き一つ忘れてのどらかに  
 酒場で歌ふ芸に入門  
 ヒルズ族鬱病までも飼ひ慣らし  
 ドアの閉まらぬエレベーター乗る  
 有限の脳で無限を考へて  
 飽かず眺める噴水の水  
 本命はポニーテールの美丈夫で  
 君を落としたマジシャンの技  
 言ひ分けをしない生き方見直され  
 象は百年ねずみ一年  
 上海の租界で仰ぐ望の月  
 か細き音の胡弓身に入む  
 ナオ 秋深し筆不精からはがき来る  
 耳順となれば髭をたくはへ  
 アルプスへヒマラヤへ行きこみ拾ひ  
 濃厚牛乳満点の味  
 幼子の夢の中まで花の色  
 瀬戸内海に生るる魚島  
 連衆 八代 嫺 松原弘子 村田富美  
 豊田好敏

洋麻 洋碧 碧や 麻同 碧や 洋麻 碧樹 や 洋麻 碧や 麻子

歌仙 「梅雨のカフェ」 百武冬乃 捌

一片の詩を得たりけり梅雨のカフェ 冬乃

さくらんぼ載る水色の皿 美奈子

登校の子らにぎやかに過ぐるらん 美奈子

ラ音すつきり鳴らすハモニカ 美奈子

屋根沿ひの風立つところ織き月 美奈子

秋蚕の眠りしんしんとして 美奈子

おどろかしへのへのもへじ描き直し 美奈子

アシメトリーのスカートで決め 美奈子

妬けるねと言はせたいひと振り向かず 美奈子

髭をぴくりと返事する猫 美奈子

貴婦人の名あるSL北の果 美奈子

寒月仰ぎ囓る館麵麩 美奈子

靴底に入れるホカロン売れに売れ 美奈子

ワールドカップで活きよ武士道 美奈子

金丸座金比羅山の裾に建つ 美奈子

禿頭白髪杖の講中 美奈子

花前線ネットサーフィンきりもなく 美奈子

戻り鳴る池のさざ波 美奈子

ナオ憂鬱な留学生の春の風邪 美奈子

エレベーターの試運転する 美奈子

防人のイラクにいまだ軋む砂 美奈子

蘊蓄しきり有機農法 美奈子

草蛍光れ光れと声かけて 美奈子

途中省略汗の経文 美奈子

罪の舟遊る二人の渦の跡 美奈子

邸内別居でお家安泰 美奈子

フリーター息子世間でかく呼ばる 乃

ジョーカー引けば料理番なり 乃

絵本から抜け出て来しか望の月 乃

どんぐり独楽が宙をとび跳ね 乃

ナウ芸術祭テーマ論議の無頼めき 乃

其角に做ふ酒十五才 乃

蒙古に親孝行の家を買ひ 乃

日曜大工出前サービス 乃

千万のフェアリー棲むか花の梢 乃

初虹浮かぶ夢の如くに 乃

連衆 中田あかり 山本要子 鈴木美奈子 乃

歌仙 「夏至間近」 生田昌義 捌

ネクタイをかく結ぶや夏至間近 昌義

巣立ち燕のくるり軒先 一枝

出港の銅鑼の音遠く響きあて 實

切絵のナイフひたすらに研ぐ 路子

十三夜ランプシェードの色を換へ 昌子

うからの困む卓に秋草 路

炊き出しのおにぎり並ぶ運動会 昌

ちよつと自慢の白き二の腕 全

あの日からファーストネームで呼ばれをり 路

ビジネスレターの体の恋文 一

右せんか左せんかと揺れに揺れ 實

大統領の悩み深まる 路

教会のステンドグラスに寒の月 實

冬雁眠る風の湖 一

かくれんぼ鬼を残してちりぢりに 路

青空仰ぐ路地の抜け道 常

花降らば吟醸の杯溢れさせ 一

へうたん島の蛙合戦 實

ナオ一筆の春の便りのうれしくて 昌

想ひ出深きプーケット沖 路

のうのうと余祿人生屁もひらず 實

お国訛りの抜けぬ民謡 路

熨斗つけてくれてやりたいカレンだが 一

ボディブローの効いてくる愛 全

父は父子は子の窯をそれぞれに 路

勘の取り方秘伝相伝 昌

賑はひの彼の世の運座豪華咲き 路

微笑爆笑揺れる琴線 常

上弦の月もいびつに酔ひどれて 路

溢れ蚊叩き村の寄り合 昌

ナウ格安のツアードで誘ふ御命講 實

肩のラインのやはらかき人 昌

赤牛は阿蘇の山並をちこちに 一

雲流る合ひ飛行船追ふ 實

見も知らぬ道連れやさし花の庭 常

ラジオニュースの麗かな午後 昌

連衆 西田一枝 梅田實 倉本路子 路

中野昌子 一

歌仙 「父の日や」 武井雅子 捌

父の日やけふも手にとる『十七季』 雅子  
額あぢさみの咲きそろふ庭 久美子  
出港の銅鑼の大河に響くらん 政志  
ライター捜す胸のポケット 恭子  
仰ぎ見る窓に月光砕け散り ふみ  
休暇明けたる子らの成長 久  
ジーンズを爺もはいてる盆踊 志  
話しながらキスの真似して 久  
自称うぶ実は相当まめなのよ 恭  
預金利息はほんのおしるし 久  
阪神の球場までは阪急で 志  
どつぷりはまる推理小説 恭  
月中天身内貫く鎌鼬 久  
だあれもみない枯野渺渺 久  
旅好きの鞆いつでもリビングに 志  
四輪駆動買ったも買ひ替へ 久  
衣擦れの音残しゆく花の客 久  
うす紫に染まる佐保姫 久  
ナオ春飛魚の空中飛行きりもなし 久  
スケッチブック二冊目となる 久  
イタリアの裏町で遭ふ故郷の友 久  
昔巻毛で今はつるりと 久  
DNA調べ尽して拉致家族 久  
麦稈帽子どこへ行ったの 久  
リーダーはこの山小屋にゐたといふ 久  
ブログ立ちあげ愛のチャットを 久

太股にあなた命と刺青す 志  
粗削りなる木彫仏像 志  
猿沢の地面に揺らぐ月清か 志  
リズムとりつつ鉦叩き聞く 久  
つばめの巣をば食うて逝くとか 久  
なには節この頃復活する兆 志  
下宿においた丸い卓袱台 恭  
花吹雪熟睡児の夢安らかに 久  
富士の真向ひさくら蝦干す 志

ナリ秋場所の優勝の盃飲みほして 久  
つばめの巣をば食うて逝くとか 久  
なには節この頃復活する兆 志  
下宿においた丸い卓袱台 恭  
花吹雪熟睡児の夢安らかに 久  
富士の真向ひさくら蝦干す 志  
連衆 副島久美子 峯田政志 式田恭子  
中村ふみ  
歌仙 「真つ直ぐに」 松島アンス 捌  
余り苗水真つ直ぐに流れけり アンス  
初鯛の鳴き出づる頃 淳子  
気に入りのテール掛けに取り替へて 美代子  
急ぎ宿題終へし弟 和代  
東にうなづくごとき望の月 ゆみを  
そぞろ寒しと交はず挨拶 和  
太刀魚の長さを競ふ釣り人ら 淳  
百数十代続く家系図 和  
嫁ぎては連れ子の世話もみなこなし 淳  
カルチャーセンター講師追っかけ 代  
原語にてベストセラーを読了す 代  
白の上下で聖地巡礼 和  
月光にくしゃみの猫のまるまると 和

ホットウキスキーチョコ齧りつつ 代  
甘言に乗りなさんなよ総理殿 代  
日本代表修羅場どこまで 淳  
暗き扉を開けて目交ひ花の山 淳  
都踊のよく透る声 ア  
ナオ屋上に蜜蜂の箱並びみて 和  
歩行者天国新茶ゆっくり 和  
お喋りの種もあらかた尽き果てる 淳  
癒しグッツは写経筆ペン 代  
シオートパンツ長き膝折る異邦人 淳  
めつぼう怖い梅雨の雷 和  
つつもたせどう落とし前つけるのか 淳  
啞へ煙草にルージュ濡れる 代  
スシ・バーのカリフォルニア巻キャビア卷 和

結構高くついてしまった 淳  
名月を宇宙船から賞づる夢 代  
目覚め間近き龍田姫なり 和  
ナリ止まりあるあまたの小鳥音もせず 淳  
立居振舞母に似てくる 和  
アトリエの絵の具は在りし日のままに 代  
不規則に置く庭の敷石 代  
幼な子の跳ぶたび挿の花揺るる ア  
春の夕べに響くフルート 和  
連衆 上月淳子 山田美代子 長崎和代  
青島ゆみを 和

平成十八年七月十九日首尾  
於 江東区芭蕉記念館

歌仙 「硝子の中」 坂本孝子 捌

荒梅雨や硝子の中の鯉呼吸

銀鼠色に浮かぶ藻の花

職業欄主婦が無職か決めかねて

ジャズコンサート開くグループ

木の間縫ひ月ぐんぐんと昇り来る

新米積んで走る湾岸

谷根千のパンフ片手に菊の路地

カイゼル髭に蹤いてゆく猫

女房とこどものことは伏せてをき

切れる包丁捌く俎

地主から受取る札の冷たかり

売る魂に入むる爛酒

アベマリア木の教会は山峡に

ラケット抱いてさんざめく群

飴細工吹けば生まるる勇み駒

床屋談義に北のあれこれ

夕月の落花を乗せて渡し船

蝶の寝にゆく二の丸の草

ナオウらかな町に赤ちゃんコンクール

末はゴジラかビル・ゲイツかと

折り紙の翼展ぶれば風の詩

ひとりふらりと北欧の旅

伯爵邸白夜に続く舞踏会

靴ぶらさげて通ふ寢室

孝子

美奈子

如子

達子

實

達

如

奈

達

奈

達

實

奈

實

如

奈

同

實

達

奈

同

實

達

如

行きずりの恋を生涯忘れ得ず

いらいらさみし禁煙の口

冬枯の唐臼が打つ陶の里

床の掛軸誰も読めない

枕経簡単に済む窓の月

椎茸採りは家族総出で

ナウ賑やかに進水式の今年酒

終楽章に響くティンパニ

三十人三十一脚倒れ込み

梅干むすび塩を利かせて

咲き満てる花には明日の愁ひあり

巣立ち夢みる抱卵の鳥

連衆 鈴木美奈子 伊勢本如子 篠原達子

梅田 實

實

如

奈

達

如

達

如

奈

如

實

孝

達

歌仙 「漂泊に」 市野沢弘子 捌

漂泊に少し似てきしサングラス

草蜚蜚にかすかなる風

染めぬきの家紋の油單替へらん

おいしく炊けた相伝の味

どの窓も月を映せるビル高く

ジャム・セツシヨンに深みゆく秋

通る度赤い羽根買ふ女学生

追っかけ専門的を愛へては

しようゆでもソースでもない眉がよし

フォッサマグナで文化分かれる

G8露国の議長はりきって

月の明かりにさがす凍鶴

弘子

久美子

恭子

嫺

忠史

嫺

恭

久

嫺

史

久

恭

サッカーの本番で出た悪い癖

能力給でかせぐセールス

群青の海に散骨しませんか

外にだしてとせがむ愛犬

花の昼路面電車の音たてて

陽炎を背に遠来の友

ナオ永き日に壺の真贋確かめる

小姑どもは小鬼赤鬼

隣国へ流し続ける母の声

節約しては増す残高

失敗を懲りずに起業繰り返し

油照りする日替りの閨

まつさらな裸美し詩が生れ

文字化けのするラブレターあり

三角のマスクの流行る六本木

右肩下がりもう直らない

父力家事場で発揮宵の月

宅配便で今年酒来る

ナウ初獵はニツカポツカにベレー帽

ダンスとブリッジ老の楽しみ

八百万なんでも拝む日本人

ゆとり教育ちよつと見直し

眼つむれば花吹雪また花吹雪

両手に提げる浅蜷蛤

連衆 副島久美子 式田恭子 八代 嫺

根津忠史

嫺

恭

嫺

久

同

史

嫺

久

恭

史

久

嫺

久

恭

同

久

同

史

同

恭

同

久

同

史

弘

同

歌仙 「万緑」 東 郁子 捌

芭蕉庵万緑雨の浄めたる

天牛虫の鮮やかな色

名講義ユーモアセンス溢れぬ

リズムとりつつ幸せな時

雲の間を割りて大きな月昇る

松茸探し友に誘はれ

唐辛子束ねて胸のブローチに

カストラートの甘き歌声

真剣な愛の言葉に呆然と

浮名の噂ちよつと気掛り

木枯しを横ざまに切り群雀

寒々の月ガレ場移りて

マージャンの面子集めに苦労する

血統書つき柴犬を飼ひ

燻製の匂ひ拡がる小屋の中

和尚ほろ酔ひ経は駆足

見はるかす大和三山花霞

ボール打ち合ふ園のうららかに

若鮎の上る川辺の草枕

坊ちゃんもはや百歳になり

ロープウェイ天守閣への列につき

サキソフォーンの快き曲

面白い読めば基督謎解ける

この子の父は誰でありしや

投げキッス受けて奪はれパリの街

死ぬまで好きと言って下さい

淳 壽 士 壽 郁 淳 郁 士 淳 郁 士 淳 壽 士 淳 郁 士 淳 壽 郁 淳 壽 郁

夏の海將軍様がかき回し

正直者はいつも馬鹿みて

月走るジヨギングをする我と共に

敬老の日を祝はるる幸

ナリ新薬に埋まり牛も夢をみる

青い背広で新車ドライブ

故郷の小学校を友と訪ひ

石のひとつも古き想ひ出

花筏広き河口に揺蕩ひて

大漁旗の螢鳥賊船

連衆 上月淳子 横井士郎 杉山壽子

連衆 上月淳子 横井士郎 杉山壽子

歌仙 「天地を」 峯田政志 捌

天地を洗ひ流して送り梅雨

首をすくめる軒の子燕

紫の袷紗さばきもあざやかに

銘菓をほんとはたく木の型

児の描く月をいつまでもほめてやり

少しく紅葉したる遠山

猪が湖渡りゆくざわめきに

女子高生の腿の太さよ

好きだから軽く意地悪ハムレット

有り難いけど困る縁談

宅配でどかっと届く美味佳肴

何処かに飢ゑてゐる邦もあり

町 枝 同 町 雅 碧 町 碧 一 千 雅 政 士 淳 壽 郁 士 淳 郁 士 淳 壽 郁 士

オンドルの冷めたる窓辺月仰ぐ

サッカー選手少年の夢

体格を鍛へて次に国語力

大人の塗り絵本屋にて買ふ

落慶の五重塔に花の舞ひ

佐保姫様もほろ酔ひの昼

ナオ行間に妖しき気配暮遅し

殺し屋の目が覗く照準

ロボットにすべてまかせてお茶にしよう

介護保険はなぜ高くなる

引き揚げてつかみどころのなき水母

氷いちごの甘き誘惑

後家さんの箍はそろそろ外れかけ

解かれて鹿のこ緋縮緬散る

伝説の与謝野晶子も年老いて

レンタカーにて巡る半島

ホルン吹き羊を寄せる小望月

葡萄酒醸す修道士たち

ナオ露ほどの反故の余白の余命にて

奥の細道なぞる鉛筆

眷属の揃って並ぶ写真館

追ひ風受けて快走の船

坂の道御衣黄の花咲き残り

居職の背にとまるてふてふ

連衆 武井雅子 原田千町 西田一  
松本 碧

碧 志 町 枝 碧 町 雅 町 枝 碧 同 町 碧 町 枝 雅 枝 雅 枝 同 町 碧 町 枝 雅 枝



歌仙 「水の行方」 久保田庸子 捌

はかりある水の行方や未草 庸子  
 夏の雲わく遠き山脈 良子  
 ショッピングモールに早も列ありて 秀樹  
 エスニック調小物購ふ 千恵子  
 月今宵大皿卓の真中に 遊民  
 釣師の揚げる鯊の天婦羅 樹  
 ひようひようと吹く少年のひよんの笛 良  
 おさげ二本の横顔に惚れ 千  
 津軽なる城址公園しのび逢ひ 樹  
 マナーモードをOFFに切り替へ 民  
 エレベーター先づメーカーをたしかめて 樹  
 神のみぞ知る地獄天国 良  
 熱爛を酌み交しては月歪む 千  
 くしゃみの途端思ひだす用 同  
 認知症といふはいつたいナンダベナ 樹  
 アインシュタインアツカンベする 同  
 黒猫の眠りむさぼる花の陰 良  
 遍路心得いつも携へ 良  
 ナオ春闘の鉢巻姿とんと見ず 良  
 ベジタリアンは子煩悩とか 良  
 アクアリウム甚兵衛鮫はゆうゆうと 樹  
 阿呆面してほじる鼻糞 良  
 赤富士を切り絵巧みに老画伯 樹  
 サマーハウスは丸太手作り 民  
 女源氏自分好みに飼育して 千  
 鞭と鎖が愛を深める 樹

□がまへ□がまへに迷ひをり

自衛隊員イラク撤収 庸  
 人類の歴史を月は眺めつつ 樹  
 命ながらへ蛇穴に入る 良  
 ナウ行く秋の鈍き音して古時計 民  
 幽体離脱またも寝ぼけて 千  
 できるよとでんぐり返しみせる孫 樹  
 おまけ目当ての菓子をねだりぬ 民  
 行藤の地いつか訪めなむ花の頃 庸  
 夢いっばいに待てる雪解 民  
 ・行藤：延岡市北方町にあり。行藤の座にて巻き上げたれば。  
 連衆 本屋良子 青木秀樹 鈴木千恵子  
 内田遊民

歌仙 「長き法話」 佐古英子 捌

風死して法話の長き古利かな 英子  
 命清しき五流れの瀧 央子  
 切り絵師は客の所望を聞き入れて 路子  
 主と共に立ち止まる犬 曉巳  
 合併の町をくまなく渡る月 華蔵  
 新酒で乾杯角の居酒屋 路  
 海羸廻しよい年をして覗き込み 央  
 援交などは神代よりあり 巳  
 わがままも片目つむれば許される 路

向う三軒みんな御承知 評判の大河ドラマは佳境へと  
 白菜を漬け派手に塩ふる 冬月にとどけと櫓太鼓打つ  
 富士に涙す帰国隊員 エレベーター思はず社名確かめて  
 買い物籠に結ぶスカーフ 幾株の若木を食ひて根尾の花  
 どこか遠くで亀の鳴くなり ナオ蜂が来て快速となる縄電車  
 あつと云ふ間にくぐるドーバー パパラッチスクープつかみ世も騒然  
 緑青の吹く隠し銭出で 品格も名誉も捨てて利に聡し  
 「谷間の百合」の恋に魅かるる 道行の先を塞ぎて鳧の列  
 希望を抱きめざす我が夢 中年層席を譲らず詰めもせず  
 柔軟体操骨がぎしぎし 秋めぐりやつと自説が学会に  
 菊師の奥義聞き書きの月 ナウ珈琲の香の揺ゆたひて寒露なる  
 義理と人情寝ても覚めても 先生は先に生まれただけのこと  
 小雨に濡れる捨てし自転車 神御座す紉の森の花万朶  
 やよひ狂言大和屋アと声 連衆 遠藤央子 倉本路子 島村曉巳  
 山田華蔵



桃雅会十五周年記念

熱田神宮奉納正式俳諧興行

| 式次第     | 役割        |
|---------|-----------|
| 一 席改め   | 宗匠 杉山 壽子  |
| 二 席入    | 脇宗匠 宮川 侑子 |
| 三 配硯    | 執筆 松尾 博雄  |
| 四 献花    | 知司 長谷川 芳子 |
| 五 執筆呼出  | 副知司 島田 裕子 |
| 六 文台捌き  | 座配 伴野 末季  |
| 七 俳諧興行  | 座見 浅井沙衣子  |
| 八 花前    | 花司 中森美保子  |
| 九 玉串奉奠  | 玉串 尾藤 禎子  |
| 十 花の句披露 | 配硯 清水美登里  |
| 十一 端作り  | 佐藤久美子     |
| 十二 吟声   | 老長 細川 研三  |
| 十三 文台返し |           |
| 十四 作品奉納 |           |
| 十五 納硯   |           |
| 十六 挨拶   |           |
| 十七 退席   |           |

平成十八年五月十四日  
於 熱田神宮龍影閣

熱田神宮奉納 俳諧之連歌

二十韻 「新たなる」

松尾博雄 捌

新たなる力溢れん新樹かな  
 孵る燕のごとく継ぎし代  
 入念にアトリエの窓拭き上げて  
 ふと口ずさむ美しきシャンソン  
 細川研三  
 青島ゆみを  
 山田歌子  
 長谷川芳子

月円かさざなみ絶えず渡し場に  
 衿を撫でゆくうそ寒の風  
 お下げ髪ほのかに甘いレモンの香  
 恋占ひに一喜一憂  
 何時の世も出世するのは劣等生  
 車内広告派手な文字浮き  
 宮川侑子  
 伴野末季  
 中森美保子  
 古賀幹子  
 高橋良風  
 島田裕子

ナオアルプスのモン・セルヴァンに月冴ゆる  
 スノーボードを乗りこなしをり  
 憑かれたるやうに夢中の尼御前  
 寄り道防止夫の手料理  
 耐震の質疑応答さじ加減  
 仮面変へても素地はひよつとこ  
 浅井沙衣子  
 大口元通  
 手島伸子  
 古賀寛哉  
 足立徳子  
 武村利子

ナリ誰かしらわからぬままにクラス会  
 ほらほらここに蝶のふはりと  
 庭石の北斗七星花の彩  
 微醺おびたる長閑なる午後  
 伊藤容子  
 くのあや  
 杉山壽子  
 執筆

執筆役を終えて 松尾 博雄

桃雅会は、寛永十三年の熱田神宮法楽俳諧万句興行以来三百五十年余途絶えていた法楽俳諧興行を平成五年に復活させました。以後平成八年、十一年それに今回と四回の正式俳諧興行を熱田神宮において行って参りました。この度の興行は桃雅会の発足十五周年を記念するもので、猫養会の会長青木秀樹様はじめ東西から多くの貴賓をお迎えしての正式俳諧でした。

執筆役を務めるに当たり、初めての経験でもあり、桃雅会杉山壽子代表はじめ会員の皆様には大変お世話になりました。当初軽い気持ちでお引き受けしたのですが、これまでの興行を収録したビデオを拝見し、これは大変なことと実感いたしました。執筆役については美濃派獅子門の例を見聞きしていた程度ですが、その場合執筆の所作は興行全時間のおよそ3分の2ほどであり、全体に占めるウェイトがはるかに高いものだからです。

四月末亀戸天神社の正式俳諧興行を見学したり、ビデオを繰り返し勉強したりで悪戦苦闘の連続でしたが、何とか務め終えることが出来ましたのも皆様のお陰と心から感謝を申し上げます。

今回の貴重な経験は、正式俳諧興行という我国の伝統ある古式を継承し正しく後世に伝えていくことが、連句に係わる我々にとつて大切な責務であることを認識し得たことでもありました。

## 『連句入門』重版について

生田目常義

東明雅先生の『連句入門』が中央公論新社から約十年ぶりに重版されこれを書いている時点で一ヶ月半がたちました。

総発行部数は一千部ですが、この間猫蓑会へいただいたご注文だけで五百部を越える勢いで売れております。

猫蓑会発の販売が好調なことは、会の団結やこの書籍の重要さを解っている会員の意識がそろうていること、また猫蓑会以外の方々の猫蓑会への親近感の強いこと、を感じさせ頼もしい限りです。

私の周辺でも大学院修士課程在学中の研究者や地方連句協会の方々に一挙大量購入していただき、たいへん感激いたしました。

これからの課題は二つで、まず猫蓑会以外の一般書店ルートでどれだけの発注があるか、また諸方面にお願している大学・短大などの教科書・副読本・参考書としての購入あるいは指定がどのくらいあるか、ということです。

前者は会員の皆さまを始め連句愛好者の方々に『連句入門』が発売されている、という情報がどこまで浸透して行くか、またその方々が連句に興味を寄せる方々へどれだけ奨めていただけるか、によります。実際の市場か

らの注文なので出版社からすれば一番注目するところですよ。

後者はなかなか把握も難しく時間も掛かる話です。というのはいま大学などでは学期初めにシラバスという学生向けの講義ガイドが配布され、そのなかで講義に使用する教科書副読本などが指定されます。

シラバスの作成は教員の方々が行いますが配布は新学期四月です。従って例外は別として来年一月か二月初めにシラバスで教材指定され、四月になるとぼつぼつ学生の購入が始まる、ということですよ。

気の長い話ではありますが、教材として指定されることは出版社にとつて長期にわたる需要が見込まれることであり、また書籍としてのステータスが大きくあがることでもあります。

そのことは書店での注文増とあいまって出版社として継続的に『連句入門』を版行していく可能性を大きく高めることにつながり、このことが連句文芸の普及への手助けになり新しい連衆の登場で私たちがおおいに楽しい思いができることに繋がっていくことはいまでもありません。

会員の皆さまも右のような事情をご理解の上、周辺にご関係の方々がいらつしやるような機会がありましたら、ぜひともご宣伝ご勧奨のほどをどうかよろしくお願い申し上げます。

さて、『連句入門』ですが、私も少々購入しあらためて再読三読いたしました。

感想を申し上げれば、東明雅先生から宿題をいっぱいもらっちゃったな、ということですよ。以前解らなかつたことが今回の再読で解つたということもあるのですが、「これをどのように考えるのか？」「なぜこういうことになっているのか？」という難しい問題も登場して来ました。問題というか、宿題それぞれをすべて私が解けるはずもないのですが、小さなことひとつでも答を見つけることができれば望外の幸せですよ。

問題意識を共有する方々と議論しながら検証していくのが楽しみです。

また長年にわたつて東先生から教えを受けた方々の中にそれぞれの答えや解答への道筋は存在していると考えています。

そういうこともあつて、まずはこの猫蓑通信に以前はあつた連句についてのQ&Aのコラムの再登場があらためて待たれます。

Qの方はいくらでも出しますので、あのコラム復活を待望しています。

『連句入門』8版の改訂

頁 行

|     |      |  |
|-----|------|--|
| 48  | 2    | 華か ↓ 華やか   |
| 70  | 5    | 中春か晩春に転ずるよう<br>中春・晩春・三春に転ずるよう                    |
| 82  | 3    | 従来の三句去りを二句去りに<br>してゐる。                           |
| 89  | 1    | 従来から三句去り。<br>つくしまで人の娘をめしつれ<br>・印 活字が太い<br>普通の活字に |
| 187 | 終より6 | 冬がれわけてひとり唐萱 ↓<br>一字下げ                            |
| 206 | 終より4 | ここは破の段 ↓ 急                                       |

『連句入門』9版は右の箇所が改訂されています。

連句入門

原田千町

この度第9版になる「連句入門」が刊行された。8版までで絶版になりかかり、一般の本屋さんから一時姿を消していたようだが、猫養会役員の方々の御努力により再販され、書店に注文されれば取り寄せてもらえらることになった。この「連句入門」は連句をするものにはバイブルとも云えるもの、多少とも連句に興味を持つ人の書架には必ずやこの一冊はあるであろう。芭蕉は俳句の祖と知るのみで彼の俳諧には関心の無い人も多いかと思うが、これを読んだ後には、連句と云うものに惹かれざるを得なくなるのではなからうか。連句をなさる方それぞれに、御自身の連句入門のエピソードをお持ちだと思ふ、私個人の連句入門は、或る日ある時突然に叔母が和歌の様なものを見せ、これに五七五を付けよと云うのである、叔母と友人とが連句といふものを試みようとして手探りで始めたものの二人では物足りなかつたのか私に句を回してきた、当方は連句といふものを全く知りもせず関心もなかつたので、不承不承幾つか五七五にして渡し、それから三吟歌仙の、ようなものが始まることになった、始めてみると中々面白くもあつた、まずは連句の何たるかを知るべく本屋へ行き、連句とあるものを三四冊ほ

ど買い込んだ。其中で東明雅著の「連句入門」に改めて、付と転じと序破急の構成美を認識し、最良の入門書だと感じ先の二人にも薦めた。その後間もなく朝日新聞の催し欄で連句入門 東明雅 とあるのを見つけ早速に入門した。教室はほぼ満員だった。後になつて知つたのだが、殆どの先輩方は同じカルチャー・スクールの俳句講座から入られた方々で私は五期生、俳句の嗜みなど全く無い私にとつては何とも心細い限りであつた。その頃の明雅先生は颯爽として弟子達の憧れであつた。講義は明快で楽しく、その折りのプリントは私の宝になつた。実作の時間も面白く夢中で授業を受けていたものだ。入門後間もなく誘われて関口芭蕉庵の連句教室に出るようになったが、明雅先生捌の席で初心者の私はただあつぷあつぷしながらも、座の文学の醍醐味を知ることとなつた。これが私の連句入門である。

連句といつても残念ながら未だ御存じない方も多い、色々説明してみても中々分かつて頂けないが、そうした折には、このようなことをしてきますと「連句入門」をプレゼントすることにした、これが何より一番解って頂ける道のようなのである。

この度、夫東明雅著『連句入門』の重版に当り、青木秀樹会長・島村曉巳様・生田日常義様・松本碧様ほか、猫養会の方に格別の御盡力を戴きました事を厚く御礼申し上げます。

東 郁子

『根津芦文書簡』と二十韻

三浦 隆

明雅先生に私が初めてお会いしたのは昭和五十一年十月二十三日からの「俳文学会第28回全国大会」が松本の信州大学で開催されたときだった。

当時、大学院に在籍していた私は様々な論文に出てくる「東明雅」という風流なお名前に引きつけられ、いつしかお名前にあこがれるようになっていった。その明雅先生がいらっしゃる信州大学での俳文学会ということので私の胸はときめいた。

一日目の研究発表、総会に続き懇親会が「レストラン松本館」で開催された。明雅先生と一面識もない私は、周りの方達と談笑なざる先生を羨望の眼で遠くから見ているが意を決して自己紹介することにした。私は連句に興味があり鎌倉の清水瓢左翁に連句の手ほどきを受けていることをお話しすると明雅先生の眼が優しくなった。瓢左翁からは「根津芦丈先生」というお名前を何度も聞いていたので明雅先生に「連句指導のときには瓢左先生から根津芦文先生はこうであったとお聞きしています」と言うと、明雅先生は「自分にとって師にあたる方です」とおっしゃった（定かではないが、今、思い出すと明雅先生の周りには宮坂静生先生、二村文人氏、五十嵐譲

介氏がいらしたような気がする）。

感動のままに俳文学会を終え東京に戻るといつもの大学院生活が始まった。その中でも月二〜三回はある古書展に行くのは私にとつてのささやかな楽しみであった。

上野のデパートでの古書展であったろうか。開店の時間に合わせて行ってみると会場はまだ客もまばらだった。書簡類が置いてある店に行き上から順に見ていくと「鶴澤四丁宛根津芦丈書簡」が二通出てきた。更に山を切り崩していくと「伊藤松宇」「鶴澤四丁」「森茉莉」の書簡が出て来たのでそれらはすべて買い求めることにした。

「根津芦丈書簡」から読み出してみたが、手に負えない部分が相当出て来たので、普段から兄事している大畑健治氏に教えを乞うたところ、氏は快く御教示下さった。

ようやく全文を読み終えてから明雅先生に「根津芦丈書簡」を手に入れたことと、翻刻したものを信大の『藝道』に投稿の可否を厚かましくもお尋ねしてみた。明雅先生からはすぐに原稿を送るようにとのお手紙をいただいたので書簡のコピーも添えてお送りした。

昭和53年11日『藝道』第4号に「現代連句形式の一試考——根津芦丈書簡より見た——」という題で早速掲載いただいた。

内容を抜粋するとおおよそ次のようなものである。茶封筒の日付けは昭和10年3月25日と考えられる。

他石翁病中之事少しも知らず二居り、直二見舞状差出申候處、本日翁自筆にて寝てハ居るか大分よろしと申参り・び居候。何せ連句ニ付てハ大切之人故、めつたの事があつてハならぬと存居候。

連句鼓吹之為め十二行御考案試作御示し、拝讀仕候。古来短い式目のものも澤山有之候へとも、あまり行はれぬもの二候。連句ハ歌仙ニ上越すものハ無之候。

歌仙の庄縮面白き思付なれと、随分究屈のものにて、中々むつかしからんと存候。又、三句か表、三句裏と云ふも、もし懐紙ニ認めるとすれハ、長短の為変な体才二なりハせぬかと存候。

小生ハ寧ろ、十六句として百韻の首尾の同数なれと、内容ハ全然変つた左記の如きものとしてハ如何や。御一考被下度候。

一、表四句、裏四句、以上一折。二折も同数。

一、月一。花一。

一、春秋二句より三句迄。

一、夏冬一句より二句迄。

一、全て三句去り。

一、表二神、釈其他嫌ハぬは、外の短いものと同一。

一、起句。春の場合ハ脇か第三ニ花をす

る事。もし出来ぬ時ハ、二折七句め

二別の季の花をする事（冬季ニ正花あり）

一、月八、五句めを定坐として、起句二

秋以外の月の出た場合ハ素秋差支な

しとして出来るだけ四季を欠かぬ事。

こんな事二すれハ雜句も相応ニあるから、

あまり究屈てもなからんかと存候。愚見

急ニ思付しまゝを申上候。(中略)旧連

句の不合理や非科学的の處ハ芭蕉翁の心

法でとんどん改めて行いハ、差支なしと

存候。小生なども諸制約や、氣に入らぬ

ものハちつとも守り不申。大体芭蕉翁を

師と思ひ、七部集を手本と致居候。

この書簡によると芦丈翁は連句形式では歌仙が最上であるとしながらも、歌仙の世界だけにとどまらず新形式を考案していたようである。

その後、東京湯島にある靈雲寺に連句の額を奉納するときに明雅先生にお会いすることができた(その場には井本農一先生もいらしたと思う)。明雅先生に「根津芦丈書簡」の現物をお見せすると先生は「芦丈先生は歌仙にとらわれず新形式をお考えだったんですね」と感慨深げにおっしゃった。

一、二年後、「俳句文学館」で明雅先生のお話しがあるとのこと出かけていくと、明雅先生は二句の付合の具体例をお話しになり、連句形式のことになったとき、「根津芦丈書簡」での記述を紹介して下さった。「根津芦丈先生でさえ歌仙という一形式だけにはとらわれていなかった」との内容であったと思う。

大学院を卒業し中学、高校を経て母校での助手を勤めることになったとき、明雅先生からはお祝いと激励の手紙が届き胸が熱くなった。

明雅先生からは東京堂出版の『連句辞典』執筆の声をかけていただき、そのメンバー七人で「七騎の会」を結成し、おうふうから『連句―理解・鑑賞・実作―』を出版することになるが、度々、編集会議と称して明雅先生との楽しい実作、お茶の水駅近辺での酒を飲みながらの語らいは忘れることができない(明雅先生はいつも黄金の逃げ足であった)。

昭和60年3月1日季刊『連句』第8号(鈴木千恵子さんから御教示いただいたが、もし聞き間違えていたならお許し願いたい)に「連句二十韻形式」を明雅先生が提唱なさったとのこと。今となつてはお聞きすることはできないが、酔った勢いで「根津芦丈書簡」の連句形式、明雅先生の二十韻のことなどをうかがえばよかつたと思う。

明雅先生のことを思い出す度に明雅先生が新たに二十韻を打ち立てた裏には「根津芦丈書簡」の影響があつたのでは、と思う次第である。

著者紹介

日本大学工学部助教授

共著 「連句」―理解・鑑賞・実作―

共著 「連句」―理解・鑑賞・実作―

共著 「連句」―理解・鑑賞・実作―

共著 「連句」―理解・鑑賞・実作―

おおうふう刊  
おおうふう刊  
おおうふう刊  
おおうふう刊

新連句「二十韻」の提唱

東 明雅

次の表が、私の考えた新形式の二十韻である。

|     |      |      |        |
|-----|------|------|--------|
|     |      | 二十句  | (一花二月) |
| 初折  | 裏 四句 | 表 四句 |        |
|     | 裏 六句 | 表 六句 | 折立 月   |
| 名残折 | 裏 四句 | 表 六句 | 五句目 月  |
|     |      |      | 三句目 花  |

これだと、歌仙よりはずつと軽いが、半歌仙よりはやや重く、歌仙の重量感と複雑なおもしろみもある程度味わうことが出来る。

私はもともと、歌仙で最もおもしろいのは破の段で、しかも破一段・破二段と分かれているところに妙趣がこめられていると思つてきた。それに対して、序と急とは、必要ではあるけれども、それほど凝つたものを見せる必要はないのであつて、ことに序については連衆の気分を鎮め、和をはかる効果は大きいけれども、発句と脇とは早速に手軽に運ぶべきだと思つている。この二十韻の表四句は約二十分というところが標準であろう。裏六句と名残表六句にはそれぞれ一時間ずつかけてゆつくり楽しみ、最後の名残裏にまた二十分かける。名残裏も、花の句と拳句とは、大体定まっているようなものであるから、さほど無理でもないとする、この二十韻一巻を首尾するには約二時間四十分位あれば一応できるのではあるまいか。

季刊「連句」第8号(昭和六十年)より転載

事務局便り

◇入賞おめでとうございます。

第十八回全国連句新庄大会

優秀賞

生田日常義 「海の色」

倉本 路子 「著我咲くや」

鈴木 了斎 「敦盛草」

松本 碧 「初夏の風」

鈴木美奈子 「問はずがたり」

登坂かりん 「置賜平野」

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

須賀敬子様 三万円

山寺たつみ様 五千元

桃雅会様 二万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

◇平成十九年猫養会初懐紙

日 平成十九年一月二十一日(日曜日)

時 十二時より十七時(受付十一時半)

場所 ホテルフロラシオン青山

(地下鉄表参道駅 徒歩五分)

案内状に地図添付予定)

電話 03-3403-1555

港区南青山四一七七一五八

猫養作品集第十七号原稿募集

○応募用紙 B4判指定原稿用紙

ワープロによる原稿はB4サイズに拡大

のこと

○形式 自由 一人一卷

○猫養会員の捌き作品 平成十八年の作品

但し原則として歌仙までの長さとする。

○作品は、最初に捌きと一巡の作者名をフ

ルネームで書いて下さい。

自他場、季、通し番号は書かないで下さ

い。

新かな・旧かなの別を明記する。

締切 平成十八年十一月末日

発行予定 平成十九年三月末

○送り先

〒202-0012

西東京市東町四一四二八

☎0424-23-7817

鈴木千恵子

◇「連句入門」第九版 受付中

ご希望の方は左記へ

島村曉巳

〒231-0801

横浜市中区新山下三一十五一六一二〇七

☎045-629-5025

◇住所変更

山口美恵

〒157-0062

世田谷区南烏山一十一

ヴェーゼント芦花公園二〇二

☎03-3306-6267

森 明子

〒160-0012

新宿区南元町四一十五

日神パレステージ四〇一

☎03-3353-7750

訂正とお詫び

前号で表記の誤りがありました。ここに

お詫びして訂正致します。

六頁 下段「藤色の風」

ナオニ 海豚↓河豚

季刊 「猫養通信」第六十五号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二一二十一十六

編集人 猫養通信編集部